

伝後深草天皇筆六半切源氏積の新出断簡

中葉芳子

はじめに

『源氏物語』の現存する最古の注釈書である藤原伊行『源氏積』は、渋谷榮一氏⁽¹⁾、田坂憲二氏⁽²⁾により研究が積み重ねられている。諸伝本は田坂氏により、

と整理されている⁽³⁾。古筆切は、伝顕昭筆建仁寺切を始め、伝阿仏尼筆切、伝淨弁筆切、伝後京極良経筆切、伝寂蓮筆切が小林強氏⁽⁴⁾や田坂氏⁽⁵⁾により集成されてきた。

『源氏積』は、

一、原型本

北野本（未摘花・紅葉賀巻の残存本）

北野克氏旧藏中野幸一氏藏）

二、一次本一類本

源氏或抄物（抄出本。書陵部藏『源氏

物語注釈』所収）

二類本

書陵部本（明石巻までの残存欠本）

冷泉家本（冷泉家時雨亭叢書所収）

三、二次本

前田家本

世尊寺伊行の手になる『源氏積』は、源氏物語の最初の注釈書として、研究史上極めて重要な位置を占めているが、今日に伝存する写本は、残存本や抄出本を含めてもほんの数本しか存在せず、資料的には極めて乏しい状況にある。従って、わずかな古筆切や断簡の類でも、その欠を補うものとして重要である⁽⁶⁾。

と田坂氏が述べられている。先に掲げた通り、完本は冷泉家本と前田家本のみで他の写本は残欠本もしくは抄出本であることから、古筆切の発掘は大切である。

一、伝後深草天皇筆六半切の書写内容

ここに『古筆学大成24』⁷⁾に「伝後深草天皇筆異本紫明抄切」として掲載されている断簡がある。常夏巻巻末の注と篝火巻巻名が記されているものであるが、解題に、

図版は現存唯一の断簡で、『異本紫明抄』と推定したが、宮内庁書陵部蔵本の本文とは、必ずしも一致しない。が、現存する『源氏物語』の注釈書の中において、図版の本文が『異本紫明抄』にもっとも近似するゆえに、一応、仮定しておく。

と述べられたが、『異本紫明抄』（近年は『光源氏物語抄』とも）の特徴である出典名を明記する記載法が見られないことなどから、書写内容に疑問が呈されてきた。早くは小林氏が「切2行目以降は二次本系統の源氏釈にはほぼ一致しており、源氏釈の一

次本系統と二次本系統との間の中間本である可能性もあろう」と述べられ、中野幸一氏は「本文形態や内容から見ても『源氏釈』切、それも前田家本に近い本文をもったものとするのが適当である⁹⁾」と述べられている。

以上のような小林氏や中野氏のご考察は、本文形態や書写内容からの類推であったが、その後、日比野浩信氏が新たなツレを紹介された¹⁰⁾。そしてその本文が『異本紫明抄』とは大きく異なっており、「これだけ違っているのは、当該断簡を異本紫明抄と同定するわけにはいかない」とされ、『源氏釈』と比較された結果、「わずかな違いはあるが、同一と判断してよからう」として『源氏釈』を書写内容とすると結論付けられた。ここに至って、伝後深草天皇筆異本紫明抄切として『古筆学大成』に掲載されている断簡が、源氏釈切であることが明らかになったのである。

すでに紹介されている『古筆学大成24』掲載切と日比野氏紹介の切とを改めて『源氏釈』諸本と比較してみると、

『古筆学大成24』掲載切

1 にとてまたはしにかく

2 あしきてをなをよきさまに

- 3 みなせ川そのみくつの
- 4 かすならずとも
- 5 いかてあひみんたこの浦なみと
- 6 よみておほ河水のと有るは
- 7 みよし野、おほ川水の
ふちなみの
- 8 浪におもは、われこひめやは
- 9 か、り火

『源氏積』

・源氏或抄物（一次本一類本）

又いてやくあやしきなみせはとある所は

わろきてをなをよきさまにみな瀬川そのもくつの

数ならずとも

といふふる事の心也

又さていかてあひみん田子の浦なみとよみておほ川水の

とあをきしきしにいとさうかちにかきてとある所は

みよしの、おほかは水のふちなみのなみにおもは、

我恋めやは

といふふる事の心也

か、り火

・冷泉家本（一次本二類本）

いてやくあやしきはみなせかはにやさてかく

あしくともなをよきさまにみなせかはそのみくつ

のかすならずとも

いかてあひみんたこのうらなみとよみておほかはのつのみ

とあをきしきしひとかさねにいとさうかちにあり

みよしの、おほかはのうへのふちなみのなみにおも

は、わか恋れめやは

か、り火

・前田家本（二次本）

いてやくあやしきはみなせかはにと有は

あしきてをなをよきさまにみなせかはそのみくつ

のかすならずとも

いかてあひみんたこのうらなみとよとておほマかは水のと

あるは

みよしの、おほかは水のふちなみのなみにおもは、

われこひめやは

か、り火

源氏或抄物とは大きく異なるが、冷泉家本とは1、2行目、5

6行目の、前田家本とは1、2行目の『源氏物語』本文の引用が異なるだけである。

日比野氏紹介の切

- 1 こゝろのやみにもとうゑに
- 2 きこえ給むは
- 3 人のをやの心はやみにあらねとも
- 4 こを思ふ道にまよひぬるかな
- 5 中将わする、まなくわすられぬ
- 6 君とよみてふきみたりた
- 7 るかるかやにつけ給ふかたの、
- 8 少将はかみの色にこそと有は
- 9 本にことはなし

『源氏積』

・冷泉家本（一次本二類本）

野はきのさひしきはこともなのめならず物をそろし御と
ふらひかほにわれまいらせ給さきにまつ中宮の御方へ中
將つかひを使つかひにてたてまつらせ給われも御さうそくたてまつり
に御すのうちつかひにうへの御かたへいらせ給みすのはつれよ

り三尺しくきちやうの木丁きちやうのそはよりいてたる袖くちのなまめかしさ
中将ちゆうじやうみられて心の中しめゆふさまかりなきにをりしも
中将のあさけのすかたいうなるをうへに源氏げんじきよけなる
かなた、いまきひはなるへき程をかたくなしからすみゆ
るも心のやみにやといふところ

人のおやのこゝろはやみにあらねとも

わすらる、まなくわすられぬ君とよみて吹みたるかるか
やにつけ給所にかたの、少将はかみのいろにこそといふ
所

・前田家本（二次本）

のわきのあした中将のあさけすかたいふなるをきよけな
りなた、いまはきひあるへき程をかたくなしからすみゆ
るも心のやみにやとうへにきこえたまふ

人のおやの心はやみにあらねとも子をおもふみちに
まよひぬるかな

中将ちゆうじやうわする、まなくとよみてふきみたりたるかるかやに
つけ給かたの、少将はかみのいろこそといふ所は

（一行分空白）

冷泉家本・前田家本ともに9行目「本にことはなし」を持たな

いが、一行分の空白を持つことといい、1〜4行目の引用本文や引歌の掲げ方、5行目の「中将」を持つところから、前田家本に比較的近いと言えるであろう。

どちらの断簡も引歌を示しての注釈部分であることから、冷泉家本と前田家本との違いは少なく判断が難しいが、強いて言うならば、日比野氏がおっしゃるように、「源氏積の本文としての位置付けは、前田家本に最も近いようである」⁽¹²⁾ということになるであろう。

二、新出断簡の紹介

この伝後深草天皇筆源氏积切のツレが新たに一枚見つかったので、ここに紹介する。個人蔵の新出断簡は、極札により伝称筆者を冷泉為秀とする。縦一六・三センチ、横一五・三センチ、一面九行書である。大きさは日比野氏紹介の断簡が縦一七・〇センチ、横一六・二センチとするのに比べると、新出断簡は一センチ弱小さいが、余白の大きさが異なっており、新出断簡は周囲を化粧断ちしたために大きさが小さくなっているだけだと考えられる。

伝称筆者も異なるが、大きさ・書写形式・筆跡から伝後深草

天皇筆切のツレだと考えてよいだろう。書写年代は、鎌倉末から南北朝と考えられるので、伝称筆者としては後深草天皇よりも冷泉為秀の方が時代相応と考えられる。内容は『源氏积』絵合巻、藤壺御前での絵合に出された『竹取物語』に関する注釈部分である。

翻刻を示すと、

- 1 たけとりとかくやひめなり
- 2 はるかに思のほり契たりしとは
- 3 天人に成たること也この世の契は
- 4 たけのうちむすひければと
- 5 いふもひと家のうちをてらし
- 6 けめといふもそのものかたりの
- 7 事なり
- 8 くらもちの君のまことのほうらい
- 9 ふかき心もしりなからいつはり

となる。『源氏积』諸本と比較してみると、

冷泉殿為秀卿 御息所



御息所の宮の権中納言〇かたゝ物かたりやうゝのゑ
 おこりあひてよのなかのゑしともめしあつめてわれも
 〱とか、せあはせ給左右わかちて後にはいひしらぬこ
 と、もめもあやにしてゑあはせらる中將の命婦兵衛命
 婦かた人ともにて所〱にあらそふくちともおかしとき
 こしめして物かたりのおやなるたけとりのおきなうつほ
 のとしかけなどあるところ
 かくやひめとあるはたけとりなどはるかにおもひの
 ほるに契たることは天人になりたる也このよの契は
 たけの中にむすひければといふもひとついゑのうち
 をてらしけめといふもその物かたりのことなり
 くらもちのみこのまことのほいらいのふかき心もし
 りなからいつはりてたまのあたにきすをつけ〇るみ
 なこの事ともはかくやひめといふ物かたりのことな
 り(「くらもちの」以下、余白細字書入れ)

・冷泉家本(一次本二類本)

御息所の宮の権中納言〇かたゝ物かたりやうゝのゑ
 おこりあひてよのなかのゑしともめしあつめてわれも
 〱とか、せあはせ給左右わかちて後にはいひしらぬこ
 と、もめもあやにしてゑあはせらる中將の命婦兵衛命
 婦かた人ともにて所〱にあらそふくちともおかしとき
 こしめして物かたりのおやなるたけとりのおきなうつほ
 のとしかけなどあるところ

・前田家本(二次本)

ものかたりのついでにはしめのたけとりのおきなうつほ
 のとしかけなどあるは
 たけとりといふはかくやひとりなりはるかにおもひ

のほるちきりたかしとて楽人になりたる事也このよ
のちきりはたけのなかにむすひければといふもひと
つゝいゑのうちをてらしけりといふもその物かたりの
事也もくの君のまことのほうらいふかきころもしり
なからいつはりてたまのてたにきすをつけたるもみ
なこのものかたりの事也

である。新出断簡は既出の二枚とは異なり、3行目「天人に」
を「楽人に」、8行目「くらもちの君」を「もくの君」とするなど、
前田家本との大きな異同も多い。しかし、「かくやひめとある
はたけとりなど」と始める冷泉家本の注釈方法と比べれば、既
出の二枚同様、前田家本に近いと言えるだろう。

実は『光源氏物語抄（異本紫明抄）』が引用する『源氏釈』
も新出断簡に近い。参考までに掲げておく。

まつものかたりのいてきはしめのおやなる竹取
のおきなうつつほのとしかけをあはせて

あそふと云事 たけとりといふはかくや姫

なりはるかにおもひのほかちきりたかしとは

天人になりたること也この世のちきりは竹のなかに

むすひければと云もひとつ家のうちをてらしけめと云
も

その物語のこと也くらもちの

り みこ敷のまことのほうらいふかき心もしりなからいつは

てた^まけ^敷のえたにきすをつけたる也 みなこの

物語の事也 伊行^尺

注釈方法が一致するのはもちろん、前田家本と異同があった3
行目「天人に」、8行目「くらもちの君」なども一致している。

最後に

『古筆学大成24』掲載の伝後深草天皇筆切は、日比野氏によつ
て書写内容が『異本紫明抄』ではなく『源氏釈』だと明らかに
されていた。今回ツレが新たに見つかったことで、この伝後深
草天皇筆源氏釈は今後もツレが見いだされる可能性が増した
のではないだろうか。これからは伝頭昭筆建仁寺切と同様、こ
の伝後深草天皇筆切も『源氏釈』の資料として大いに注目すべ
きものだと考える。そして今回の新出断簡のように、伝称筆者

が冷泉為秀になつてゐる可能性があるということにも注意しておきたいものである。

注

(1) 渋谷栄一編『源氏物語古注集成 第16巻 源氏釈』(お
うふう、平成十二年十月)。

(2) 田坂憲二『源氏物語享受史論考』(風間書房、平成
二十一年十月)。

(3) 注(2)書、八六頁。

(4) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(『本文研究
考証・情報・資料 第6集』和泉書院、平成十六年五月)。

(5) 注(2)書、第一章三。

(6) 注(2)書、五六頁。

(7) 『古筆学大成 第二十四巻』(講談社、平成四年六月)。

(8) 注(4)論文。

(9) 中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊 第一巻

源氏釈 奥入 光源氏物語抄』(武蔵野書院、平成二十一年

九月)

(10) 日比野浩信「源氏物語古註釈断簡管見」(『愛知淑徳大学
国語国文』三十三号、平成二十二年三月)。

(11) 注(1)書により引用する。

(12) 注(10)論文。

(13) 注(9)書により引用する。

(なかば よしこ／本学非常勤講師)